



戦後の復興をささえた産業

終戦直後は空襲の被害や品不足などで苦しい生活をしていました。しかし栃木市はそこから見事に立ち上がります。戦時中から盛んだった下駄の製造では、機械を使ってさらにたくさん生産され、1950年代には、東京や東北・北海道の市場へと進出。広島県・静岡県と肩を並べて栃木県は三大生産地の一つになり、栃木市がそれを支えました。

また終戦翌年には太平山南側の山麓地帯で「大平下ぶどう組合」が発足し、ぶどう栽培が始まります。土地改良や農道整備も行い少しずつ規模を拡大させ、1973年に「大平町ぶどう団地」が完成しました。

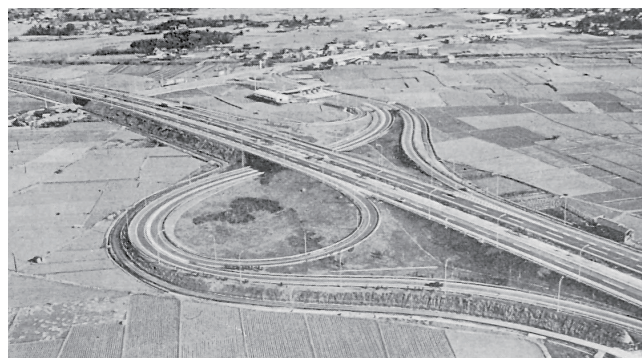


渡良瀬遊水地の豊かな生態系を次世代に

1997年に完成した渡良瀬遊水地は、河川の氾らん防止や首都圏への水の供給などに大きな役割を果たしていますが、それだけではありません。遊水地の内陸部は国内最大級のヨシ原のある湿地になっており、多くの動植物が生息する豊かな生態系が形成されています。世界的に湿地が減少するなかで、渡良瀬遊水地は非常に貴重な存在であり、2012年にラムサール条約※登録湿地になりました。この貴重で豊かな自然を、私たちは大切に保存し、次世代へと受け継いでいかなければなりません。



※正式には「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」といい、水鳥が休んだり、えさを取ったりするのに大切な湿地を保護するための国際的な取り決め。登録された湿地は環境の保護が義務付けられる。



▲上：昭和の大通りの様子（片岡写真館蔵）
下：東北縦貫自動車道と栃木インターチェンジ

急速に進化する栃木市の街並み

戦後は市中心部の街並みも大きく変わっていきます。倭橋付近から北にのびる道路がつくられ、通り沿いに店や住宅が混在する新しい町ができました。大通りはアーケードの設置や建物の建てかえが進み、伝統的な建造物も近代的に見えるように外観が変わりました。見世蔵や木造店舗が並ぶ古い街並みが、見た目には現代的な街並みへと変わりました。

1972年に東北縦貫自動車道栃木インターチェンジの使用が始まると、市街地周辺に栃木環状線など次々と新しい道路が開通し、新たな商業施設もできていきます。1990年の百貨店の出店まで、栃木市の街並みは目まぐるしく変化していきました。

...column 教えて！とち介...



どうやって歴史的な建物を残したの？

栃木市では昭和の終わりごろから市と住民が協力し、歴史的建造物を活かしたまちづくりを進めてきました。特に1990年から30年以上かけて大通りのアーケードの撤去や建造物の外観の復元に取り組み続けた結果、活気にあふれた時代を象徴する見世蔵や土蔵などの歴史的建造物を数多く残すことに成功。「蔵の街とちぎ」や「小江戸とちぎ」として知られるようになりました。

上：大通りに残る歴史的建造物 ▶
下：現在の大通り（2024年1月）

